

兵庫県立長田高等学校改善プラン

—人間力育成を目指すカリキュラム開発を通じた魅力ある公立進学校づくり—

専攻 学校指導職専攻
学籍番号 M072651
氏名 千家 弘行

第1章 高等学校を巡る問題意識

高校教育改革に対する問題を提起し、改善プランの土台となる教育に対する基本理念を記述した。

「ゆとり教育」による学力低下や公立学校不信などの課題を解決し、学校の特色化の一つの方策として、授業時間数を確保するために、2学期制の導入、7時間授業の実施、長期休業日の削減、土曜日の活用、学校行事の精選(削減)などが講じられている。その結果、以前より多忙な「ゆとり」のない学校が出現している。また、過度の受験競争の緩和のための「ゆとり教育」のはずが、難関大学への人気が集中し、進学実績ランキングが注目され、公立高等学校は、中高一貫公立高校、私立学校と競争し、比較されることとなった。

第2章 長田高等学校の現状と課題

本校の概要、教育理念、学校経営の重点、校務分掌、教育課程等を記述した。

大正10年、兵庫県立第3神戸中学校として設立された、神戸第3学区の全日制普通科伝統校である。教育方針は、「本校創立以来の神撫教育の理念に基づき、『学びの長田』として全人教育の一層の充実を図り、21世紀を担う有為な人材の育成」である。

学区のトップ校であり、学力は高く、難関大学を中心とした進学実績は県内公立高校のトップ級である。また、部活動にも熱心で、入部率はほぼ100%であり、文武両道を実現している。しかし本校にもいくつかの課題を指摘できる。第1が生徒の学力格差、第2が教員及び組織をめぐる課題である。本改善プランでは、第2の課題が大きく第1の課題を規定していると捉えている。それは、本校における協働性やコミュニケーションの不足、授業改善に対する意識の低さ、生徒の自主性や努力を尊重した指導方針の曖昧さである。そして、組織として全ての生徒、特に中位から下位の能力を十分に伸ばすことができず、学力の格差の広がり招来したという仮説につながる。

第3章 学校改善プランの概要

(1)改善プランのねらいと全体図

“公立進学校”の魅力は、高い学力養成(進学実績)だけでなくそれらを含む人間力の育成にあると考える。人間力は曖昧な概念であるが、この言葉には本校の教育理念(神撫教育=智・徳・体の調和的発達を促し、人格的基礎を築かせる)に通じるものがある。そこで、本改善プランの目的は、従来の個別のあるいは個業であった教育活動を教育目標である「人間力育成」へと焦点化することで、「協働的学校文化の創造」と「カリキュラム開発」を共に促し、「安心して学べる学校文化の創造」を実現することある。

(2)学校経営ビジョンの策定

「県民の信頼期待に応え、人間力を育成し、社会に貢献を為し得る人材を輩出する魅力ある公立進学校(スーパー・エクセレント・ハイスクール)」

第4章 協働的学校文化の創造を目指して

コミュニケーションの円滑さが、教職員の満足度、活動の効率性や効果性にも大きな違いをもたらす。また、同僚性風土は、教師の効果性や効力感を高め、生徒の学力向上にも寄与する。従って、本校の課題であるコミュニケーション不足の改善は、教育活動の質的向上を期待させる。具体的には、職員室環境の整備・改善し、ワイガヤの場を設け、オフサイトミーティング、コミュニティーの意図的設置を提案する。

教育目標の実現には、それに即した組織開発を行う必要がある。第1に、小規模であった専門部を8から5に削減し、所属人数を増やし、協働的に仕事に当たることを可能にする。第2に、校務運営委員会を経営・企画委員会と名称変更し、経営戦略策定の場であることを意識化させる。第3が、プロジェクト型経営の導入である。「21世紀人間力構想委員会—長田スーパー・エクセレント・ハイスクールプロジェクト(SHE)」を設置し、全教員が参加する。

また、職員会議の回数を減らすことで、職務の計画性と効率性を改善する仕掛けとする。

次に、教員の経営参画意識の向上のための方策

を提案する。具体的には、①学校改善アンケート実施、②プロジェクト参加、③教職員評価・育成システムの活用、④教員免許状更新講習、⑤兵庫県立教育研修所の学校経営講座の活用などである。また、ミドルリーダーを生かす方策としては、①ミドルリーダーの役割の明確化、②主幹教諭の活躍(4役会の開催)、③若手人材の抜擢などを提案した。

第5章 人間力育成を目指したカリキュラムの創造

「本校の授業は、教育目標を実現するものになっていない」という問題提起をした。本章は、改善プランの中核をなす部分であり、「人間力育成」を実現するためのカリキュラム開発について記述した。

7時間授業の問題点を解消し、65分授業への転換を提案した。さらには本校の強みである生徒の高い能力を生かすためにはベテラン教師の授業力をさらに磨き上げることとその暗黙知を形式知に転換させ、継承・改善を図ることを目指す。具体的取組は、大学、研究機関との連携、長田入試問題研究会、作問研究会、模試分析会、互見授業、研究授業、公開授業、研究紀要発行などである。

学力支援策「のびのび長田プログラム」を提案した。学力格差を縮小させ、生徒全員が伸び続けるように教師が生徒との距離感を測りながら、支援していく。その概要は、①考査後の補充の実施(1、2年)、②模試の有効活用、③長期休業中の補充授業の実施、④質問会の開催、⑤自習室の確保・整備、⑥学習と部活動との両立支援などである。

学校行事は学校教育目標実現のためにあることを教職員、生徒が共に再確認し、目的の明確化を図る。文化祭、体育大会、修学旅行の在り方について重点的に取り扱った。

キャリア教育は、大学卒業後のその向こうを見据えて行う。具体的には、高大連携を拡大する一方、視点を「生活している地域との関わり」に絞り、人間としての在り方生き方を考えるプログラムを開発する。具体的には、①奉仕活動を通し、地域を知る、②部活動を地域の子どもに公開する、③文化祭を地域への公開を拡充する、などである。

総合的な学習の時間は、「学校目標を実現するための総合」と位置付ける。『知への挑戦—NAGATAリベラルアーツ・プログラム』と名付ける。第1の役割が、教科でカバーできていない分野の基礎的教養の養成にある。第2は、教科教育では育成が不十分な、学び方、まとめ方、表現法などを身につけ、教科学習の成果を「知の体系」へと高めることにある。

全体的な連関性に注意した進路指導計画を作成

した。連関性をもたせることで、教育活動や教師の取り組みの意味合いが進路指導全体から理解することができ、よりの確な進路指導が行えるようになると考える。

第6章 安心して学べる学校文化の創造を目指して

本校には、生徒への積極的な関わり(手をかける教育)をよしとしない雰囲気がある。一方、生徒は「いい子ども」であるために悩み、不調を訴えることが多くなっている。しかし、その対応をカウンセラーなどに一任してしまうケースが増えているようだ。改善プランでは、組織としてのサポート体制を構築し、安心して学べる学校文化の醸成を目指す。具体的には、担任、学年主任、保護者、養護教諭を基本とする支援チームによる支援、教科担任とは連携を密にするための連携カードの活用、自尊感情や自己肯定感などを育むプログラムの実施(構成的グループ・エンカウンター)などである。また、保護者向けの研修型コンサルテーションの実施、PTA研修との連携、保護者会・学年通信を通じて啓蒙を図る。

教育内容の改善だけでなく、ハード、ソフト両面の危機管理を心掛け、安心できる学校づくりを提案した。

第7章 改善プランの実現に向けて

カリキュラム開発を中心にした学校改善プランを実施するには、学年進行による実施・改善が求められるため、3カ年計画を策定する。実施上の留意点としては、教職員の参画意識を高めることにある。また、1年目は授業改善に重点化し、短期的成果をあげることで、他の教職員を巻き込んでいく。抵抗感を和らげるためにも、職務の効率化と削減を進める。また、教育予算削減のなか、豊かな教育実践のためには外部予算の獲得する積極性も必要となる。

最後に、本改善プラン実現による教育委員会及び他校への影響について考察した。第1は、カリキュラム開発に対する教育委員会の支援の充実である。指導主事との連携・支援が必要となり、「ネットワーク型の教育課程行政」が期待できる。第2には、カリキュラム開発に力を入れる普通科高校への予算の重点配分である。第3に、学校の実態、地域の実態に即した本改善プランの実現・成功は、自律性の高い学校経営の成功例となり、カリキュラムの弾力化を促進させる。

主任指導教員 加治佐 哲也
指導教員 加治佐 哲也